

裏舞台 という名の 表舞台

舞台は客席から見える表舞台と
見えない裏舞台によって
成り立っている。
舞台を裏で支える人に光を当てる。

STAGE 01

緞帳

Doncho

龍村美術織物

Tatsumura Textiles Co.,Ltd.



Photo / Tomokazu Nishizawa

劇場の主役は演者が繰り広げる舞台なの
はもちろんだが、劇場には隠れた名脇役が
存在する。その一つが緞帳である。舞台と
客席との間を仕切り、実演の始まりと終わ
りの合図を果たす重要な役割なのだが、舞
台好きでも緞帳がどのように作られている
のかを知らない。京都の古き良き伝統技術
を継承し、日本各地の劇場はもとより海外
の緞帳も制作している京都の龍村美術織物
制作部の谷口仁志さんと太田尚志さんのお
二人に緞帳の話詳しく伺った。

「当社には初代龍村平蔵が大正時代に独創
と復元、そして美術感覚という3つの要素
を織物に導入して、『美術織物』という言
葉を浸透させてきた歴史がございます。緞
帳で用いられるつづれ織りという手法は着
物の帯などに使われる最もシンプルで自由
度の高い織り方。初代平蔵が作品として取
り組み、昭和天皇が秩父宮様ご成婚のお祝
いにと依頼されたお品物にもつづれ織りが
使われています。いわばお家芸でもあり、
昭和30年代につづれ織りを用いて緞帳を
作り始めました。縦糸を等間隔に真っ直ぐ
に張り、そこに横糸だけで模様を織り込ん
で行く。一番大きな特徴はシンプルな織り
方なので、自由度がとにかく高い。千差万
別な色や模様を用いて自由な発想で、ほと
んどどんな緞帳でも織ることができます」

緞帳は伝統工芸の粋を凝縮させた美術織
物であり、劇場の顔でもある。ではあれほ

ど大きな緞帳は一体どうやって作られるの
だろうか？

「まずは劇場の広さや構造を調査します。
緞帳がそのまま上に跳ね上がる一枚飛ばし
かドラムで巻き取る構造なのか？それによ
って幕の表面や厚みが決まる。そして実
際の緞帳の大きさの20分の1の原画を画家
の先生や当社制作部で描き上げます。その
原画に基づいて糸を染色。糸は一切ストッ
クしません。なぜかという何よりも原画
を忠実に再現することが重要であり、その
ためには毎回色を徹底的に吟味して、別注
で糸を染色。染まった糸は絵の具を混ぜる
様に何色かを一緒にして撚り、さらに微妙
な色合いを作ります。全てに妥協せず自
分たちの手で一から制作しているのがこだ
わり。染色と並行して原画を拡大して織り
下絵を起こす。この設計図を縦糸を張った
織機の下に敷き、職人が一目一目横糸を織
り込む。一日20センチが限度ですね」

緞帳は大きな織機で力業で織っているの
かと思いきや、さにあらず。一人の職人が
一間（約180センチ）の横幅を担当して数
人がチームプレイで制作している。

「工場というよりもここは体育館みたいで
しょ。織り下絵を描く時は紙を床に広げて
這いずり回って描いていますし、染色や糸
の撚り、織る工程も、ほとんど全て昔な
がらのアナログで手作り。何でデジタルや機
械を使わないのかと聞かれますが、使いよ

うがない。下絵を描く時は原画のタッチや
細かい線はコンピューターでは描けません
し、織る時も微妙な糸の締め加減や糸目の
調節などは機械では決してできない。原
画の忠実な再現と美術織物として緞帳を
作るには熟練の手作業が不可欠です。私
どもはみんな緞帳を作るのが大好きで楽
しみながら作っていますから、できた時は

本当に嬉しいですね。劇場では非幕間に
でも私たちが作った緞帳をじっくりと見
て下さい。遠くから見て、今度は近くで
細かい糸目も見て欲しい。つづれ織りの
帯を締めて劇場でつづれ織りの緞帳を愛
でる。芝居の楽しみの一つに緞帳を加え
ていただければこれほど嬉しいことはあ
りません」



PROFILE 初代龍村平蔵が1894年に創業以来、現在四代に至る。織物組織の実用新案をはじめ、正倉院宝物製や古代製、名物製等の復元研究を行い、「創造と復元」の道を究め、織物美術を確立。四代龍村平蔵の下、帯地をはじめ室内装飾製、つづれ織緞帳などの創作織物を製作販売している。つづれ織緞帳は全国各地の公共施設、劇場に納入していて、本年開場した歌舞伎座にも納入している。